



浦島伝説

新しい何かが始まる予感

平成23年度の学校生活が始まって1週間が過ぎました。新しい学年、新しい友達・・・、新しい環境の中でいいスタートが切れました。新しい何かが始まる予感がしています。

4月6日。新任式では、新しく来られた11名の先生方をお迎えしました。始業式で歌った校歌の歌声の大きさに驚いていた先生もいらっしゃいました。学級担任や部活動顧問の発表では、一人一人の先生方に大きな拍手が湧き上がり、生徒たちの温かさ、優しさを感じました。入学式後の準備も手際よくできました。先輩として後輩を迎える自覚がうかがえました。

4月7日。入学式では、体育館入口の2・3年生のシューズや保護者のスリッパがピシッと並べられている光景に、生徒や保護者が一体となって入学式を成功させようという気持ちが映し出されていました。もちろん、素晴らしい入学式で、来賓の方からもおほめの言葉をいただきました。

4月8日。転出された先生方が引き継ぎのための本校を訪れました。みなさん口々に、詫間中学校を離れて改めて詫中生のすばらしさを実感することができたとおっしゃっていました。

そして、今週から本格的に学校生活がスタートしました。「AKB353」を意識してか、朝のあいさつも大きな声が聞こえるようになりました。ほぼ全員の生徒がカバンを持って登校できています。ボタンを外している生徒もほとんど見かけなくなりました。

その一方で、交通ルールやマナーについては“あとひとつ”です。ノーヘルで指導された生徒もいます。これまであまりなかったことなので、詫中のよき伝統が崩れていかないかと心配です。しかし、学級全体の問題として受け止め、自主的に交通立哨をしている学級もあります。また、登校中に自転車が車と接触するという事もありました。幸いけがはありませんでしたが、少しヒヤッとしました。

右に紹介した歌は、FUNKY MONKEY BABYS（入学式の退場時にも彼らの『あとひとつ』が流れました）の最新曲『ランウェイ☆ビート』の一部です。1年生にとっては、「中学校」という世界は、ちょっと高い壁を感じるかもしれません。2年生は、「先輩と後輩の間」で初めて経験することもあるでしょう。3年生にとっては、まぎれもなく「高校入試」という高い壁を見上げながらの1年間になるでしょう。

でも、乗り越えられない壁はありません。一人では無理でもたくさんの仲間と一緒になら大丈夫です。そして、この1年間をかけて、自分の夢や運命とは何か、生きるはどういうことかななどを考えてみましょう。主役は、世界の真ん中に立つ“あなた”です。

新しい何かが始まる予感
目の前の高い壁 何度も見上げた

今自分の立ってる場所が そして歩いてく道が
僕らの描いた未来へ つながっているのかな？
夢は追いかけるほどに大きく見えてきて
いつつかめる日が来るのか 小さなこの手で
流してきた涙の分 幸せになるの？
本当ならもう少し信じてみよう

冷たい雨に負けていない この胸のぬくもりは
今 世界の端っこで生きてる証
僕らの運命はいつだって 悲しみの先にあって
その答えを探して 今日歩いていく
世界の真ん中を

当たり前前の風景 ～心がそろった風景～

毎年、年度始めに紹介している学校の風景（自転車置き場、くつ箱）です。これまでは、「心がそろった風景」として紹介してきましたが、この風景は1年間ずっと続いている「当たり前前の風景」になってきました。『詫間子ども宣言』にもある「当たり前前のことが当たり前に見える」学校っていいですね。

先輩から引き継いだよき伝統は、きっとこの先も続いていくはずです。



新学期を迎える皆さんへ

皆さん、入学、進級おめでとございます。皆さんは、この4月、希望に満ちた春を迎えるはずでした。しかし、この春は、私たちにとって、とてもつらい春になってしまいました。ご存じのように、3月11日、あの未曾有の大震災と津波が日本を襲ったのです。皆さんの中にも、ご家族を亡くされたり、あるいはいまも避難所から学校に通ったりしている生徒さんがいることでしょう。避難所の中では、皆さんが率先して、お年寄りや身体の不自由な方を助け、掃除をしたり、食事の準備をしたりしてくれているという話をたくさん聞いています。皆さんがボランティアで活躍しているという知らせも、たくさん届いています。本当にありがとう。

直接被災した皆さん。皆さんは、十代の最も人間が成長する時期に、この大きな試練に立ち向かわなければならなくなりました。いま抱えているすべての悲しみや不安から、完全に逃れることはできないかもしれません。でもいつか、皆さんが、その悲しみと向き合えるようになる日まで、学業やスポーツ、芸術文化活動やボランティア活動など、何か一つでも夢中になれるものを見つけて、この苦しい時期を乗り越えていってもらえればと願います。学校は、あらゆる面で、皆さんが、この逆境を乗り越えていくためのサポートをしていきます。

災害にあわなかった地域の生徒の皆さんにも、お願いがあります。どうか、皆さんの学校にやってくる避難してきた仲間たちを温かく迎えてあげてください。すぐ近くに、そういった友達がいなくても、遠く離れて不自由な生活をしている同世代の友達を、同じ仲間、友達だと思ってください。そして、被害を受けた仲間の声に耳を澄ましてください。

この大震災を通じて、日本国と日本社会は、大きな変化を余儀なくされます。この大震災からどうやって国を立て直していくのか。自然と共生して生きてきたはずの日本社会が、その本来の姿を取り戻すためには何が必要なのか。

もちろん復興の過程では、「がんばろう」という元気なかけ声が必要です。しかし、それと同時に、新しい社会、新しい人間の絆を作っていくために、大きな声にかき消されがちになる、弱き声、小さな物事にも耳を澄ましてほしいのです。

東北が生んだ詩人宮沢賢治は、科学と宗教と芸術の力で、冷害・凶作の多かったこの東北地方の農民を少しでも幸せにしようと考え、そのことに一生を捧げました。どうか、他人の意見もきちんと受け止めながら、自分で合理的な判断ができる冷静な知性を身に付けてください。しかしそれだけではなく、他人のために祈り涙する、温かい心も育ててください。そして、芸術やスポーツで人生を楽しむことも忘れないでください。

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』には、こんな言葉があります。「僕、もうあんな暗(やみ)の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たちは一緒に進んでいこう」。賢治の言う「ほんとうのさいわい」とは何でしょう。この大きな災害と混乱の中で、皆さんに、このことを考えてほしいのです。もしも、皆さんが本当に真剣に考えてくれるなら、きっと皆さんはどこまでもどこまでも一緒に進んでいけるはずです。そしてその先には、もっともっと素晴らしい新しい日本の国の姿があるはずです。

忘れないでください。一緒に進んでいくのは、決して日本人だけではありません。今回の東日本大震災では、世界中からたくさんの支援が寄せられています。また、この非常時にあっても秩序正しく、理性を失わない日本人の姿に、世界中が驚き賞賛の声を挙げました。私たちは、世界と共にいます。

原子力発電所の事故に対して、危険をかえりみずに立ち向かう消防士や自衛官、電力会社の人たちの姿。各地の被災地で、救命救急活動にあたった警察官や医療関係者、そして何より、本当に命がけて皆さんを守ってくれた学校の先生たちの姿を忘れないでください。そして、みなさんも、もっともっと身体を鍛え、判断力を養い、優しい心を育て、他人のために働ける人になってください。

日本の未来は、皆さんの双肩にかかっています。あなたたちのその笑顔、ひたむきな表情が、いま家族や地域の人々を支えようと懸命にがんばっている大人たちに、勇気と希望を与えています。私たちも、全力で、皆さんの支援に取り組みます。本当の幸せを求めて、一緒に歩いていきましょう。

内閣総理大臣 菅 直人
文部科学大臣 高木義明